



今年の教区の目標

われら皆 和解の器
平和の担い手

〒902-0067 那覇市安里3-7-2
カトリック那覇教区本部
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
発行人 W.F.バートン司教 1部40円
<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2023年2月1日 (毎月1日発行)

カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ

第771号 (2月号)



主よ、永遠の安息を彼らに与え、
絶えざる光を彼らに照らしてください。



帰天された名誉教皇ベネディクト16世とクレバー神父のご母堂リリー・デソーザ様のため追悼ミサが捧げられた。

追悼ミサ

敬愛する牧者であった名誉教皇ベネディクト十六世は、現地時間十二月三十一日九時三十四分(日本時間十二月三十一日十七時三十四分)、ローマにおいて九十五年にわたる人生の旅路を終え、御父のもとに旅立られました。

二十年以上にわたり教理省の長官として、さらには教皇として八年間にわたって教会を導かれたベネディクト十六世の逝去に際し、永遠の安息をお祈り申し上げます。

那覇教区では一月十日に行われた本年最初の司祭会議の前に、教区の全司祭と助祭が共同で名誉教皇ベネディクト十六世のために追悼ミサをお捧げしました。

また、当日は、一月五日にインドで帰天された、与那原教会主任司祭クレバー神父のご母堂、リリー・デソーザ様の追悼も合わせて行われ、那覇教区に息子を派遣されたお母様のため、全司祭、助祭の献香をもって故人の永遠の安息を祈り求めました。

2023年2月11日(土)教区の日
那覇教区誕生の記念日です。

共に集い、感謝の祈りを捧げましょう！

◆感謝ミサ：午後2時より ◆祝賀会：午後3時30分～5時

※ウェイン司教から、金婚式を迎える方々のお祝いと記念品贈呈が行われます。

P.S. God Loves You

By: Fr. Rodney Mondido, MSP

A story once told that a young lady received a letter from her sweetheart on Valentine's Day. The letter read: "Dearest Jane, I could swim the mighty ocean for one glance from your lovely eyes; I could walk through a wall of flames for one touch of your hand; I could leap the widest stream for a word from your warm lips and as always, your own Johnny. P.S. – I'll be over to see you on Sunday night if it does not rain."

February is often known for being a month dedicated to and all about love. But what is love? We use the word "love" a lot. It is a mighty word when used in the proper context. We understand the difference between saying "we love McDonald cheeseburgers, or we love Jollibee chicken," "we love our parents so much" and we love God." There is a profound difference. And a key thing about the word "love" is that it is an action word. Without action, love remains an empty word; love is unreal and superficial.

Moreover, we often think of Valentine's Day as the only day for couples to show their love to one another, but we rarely use February 14 to remind us of God's unmatched love for us, His children. Maybe for some single people, Valentine's Day can be a bitter reminder of their singleness and desire for a relationship. For religious people, Valentine's Day could remind them why they have embraced celibacy and realize that only the Lord fulfills the heart's deepest longing, as St. Augustine puts it. God does not leave anyone single, lonely, or alone in His relationship because out of His unending love and grace, He gave up His only son for us. He gave us eternal life because of His great and undying love for each of us.

Therefore, Valentine reminds us of the gift of God to humankind and the genuine love of God in our hearts. God loves us unconditionally and sacrificially, as He loves us till the very end. His kind of love is without any strings attached to it. The theologian C.S. Lewis once said, "He died not for men, but for each man. He would have done no less if each man had been the only artificial." God loves us so much that if we were the only people on earth, He still would have sent His Son for us.

Secondly, we will celebrate "Diocesan Day" on February 11, a day of thanksgiving to God for His constant outpouring of graces that have made Naha Diocese what it is now. It is a day of praying and remembering all our pioneering missionary priests and dedicated faithful who had laid the foundations. On that day, too, there will be a special blessing for the members of religious communities, priests, deacons, and married couples celebrating their golden 50th anniversaries. While thanking God for all graces, this is also a joyful celebration of Bishop Wayne F. Berndt O.F.M.Cap. for his 5th Episcopal Ordination Anniversary.

May the various celebrations for this month of February be a joyful reminder of God's constant love to all. Happy Valentine's Day!



四旬節の旅

ナビーン・ジョセフ・セクウェラ神父

普天間教会 主任司祭



重要な延長線上にある、常に私たちを素晴らしい新天地へと導いてくれる大切な時なのです。今年は、二月二十二日から四月六日までの六週間という短い期間ですが、四旬節は、私たちをイエスが神と向き合った祈りと断食の砂漠に連れ出し、次にイエスが来たるべき栄光を味わった

最後に、ゴルゴタの丘ではなく、復活の栄光ある空の墓まで続く十字架の道に伴われます。六週間という短い期間で、実に多くの旅をすることになります。

四旬節の考え方は、三世紀から四世紀にかけて始まりました。「四十」というその日数は、聖書にある「四十」という数字の意味、特にイスラエルの民が砂漠を四十年間さまよったことや、イエスが荒野で四十日間の断食を行ったことに基づいています。つまり、四十日間の四旬節の期間そのものを、「荒野の旅」と表現しているのです。

四旬節は、人生を振り返る中で神を探し求める時期であり、お金、物質、権力、この世の欲望など、個人を欲望により奴隷にするものを反省する時です。

イスラエルの民が受けた最も辛い奴隷制度は、エジプト人の偽りの神々を、意に反して崇拜するよう強いられたことです。

しかし、約束の地に逃れ、やがて彼らは、エルサレム神殿で唯一の真の神を礼拝することができようになり、救われます。四旬節は、私たちが現代において偽りの神々を崇拜していないか自覚し、灰の水曜日の言葉「悔い改めて福音を信じなさい」を

真剣に受け止める時です。

歴史的に、キリスト教徒は四旬節の間、何かをあきらめ手放すことで、自分の旅路を示し、神との関係にエネルギーを集中させる象徴的な方法としてきました。「だから、神の力強い御手の下で自分を低くしなさい。そうすれば、かの時には高めていただける」（1ペトロ五・6）。

四旬節の旅は、祈りと犠牲と慈愛の旅です。この期間中、私たちは意図的に普段の日常生活から離れ、人生の些細なことを脇に追いや、霊的な旅に集中するよう求められています。言い換えれば、四旬節は、巡礼の旅、つまり十字架への霊的巡礼なのです。聖イグナチオは霊的生活について、非常にシンプルな言葉で語っています。

「人は神に向かって歩いていくか、神から遠ざかっていくかのどちらかである。」

霊的生活において、停滞することなどあり得ないのです。聖イグナチオのこの二項対立は、物理的な巡礼の旅と共に、四旬節の間の私たちの行動、動きに対する現実的なチェックを問うています。私たちは神に向かっ

て進んでいるのでしょうか？それとも神から離れているのでしょうか？私はどこに向かっているのでしょうか？

この四旬節の旅では、洗礼の恵みと約束を新たにしながら、一貫してキリストに従うようにという招きを真摯に受け入れ、私たちの古い人を捨て、キリストを着ることで、復活へと新たに到着する恵みをいただきます。さらに聖パウロの、「生きるのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」（ガラテヤ二・20）と、より毅然とやるようになります。

LENT

信仰生活の最も伝統的な比喻の一つを「旅」で表します。信仰は、ある場所から別の場所への移動を伴うからです。常に慣れ親しんだ快適な状況から、まだ見ぬ世界へと人を誘います。それには、霊的・肉体的に苦痛を伴うことも時にあります。アブラハム、モーセと選ばれたイスラエルの民、聖パウロと他の使徒たちも霊的・肉体的苦痛を伴いながらも信仰の旅を全うし、神への信仰、イエス様への忠誠を貫いたのです。

山頂に連れて行き、その後イエスが渴きをうるおされたヤコブの井戸に誘います。そして、私たちの信仰の目がかつてないほど見開かれるシロアムの水に飛び込み、イエスがかつて友人ラザロを墓から解放したように、私たちを死の支配から解放し、

早起きの苦手な私が、今は毎日早朝ミサに与っている。教会に居ると神さまがすぐそばにいてくださると実感できる。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたと共にいる」(マタイ二十八・20)ハァー、なんて安心なんだろう。

神さまは教会の中だけに在るのではない。教会が特別な場所ではなく、教会の外にこそ神は在り、暮らしの中、職場、あらゆる場所でもいつも私を守ってくださっている。こんなにも大きな愛を受け取っているが、それに気づけないときがある。日々の生活の中で神さまをつい忘れてしまうのだ。まだまだ信仰が足りず、神さまが遠い存在になってしまう。そんな薄っぺらな信仰でも、私は信仰によってずいぶん救われてきた。

今、世の中で話題に

なっている宗教二世、私もそのひとりだ。母に対する不満はたくさんあるが、たった一つ、幼児洗礼を受けさせてくれたことにだけは感謝している。

母は私を十七歳で出産した。予期せぬ妊娠にひとりで悩み苦しんだのだろうと、今は思う。私が数年前から若年妊産婦をサポートする仕事に就いたからだ。母を避けてきた私が、かつての母をサポートするようこの仕事に最初は不安があった。しかし、ここに導かれたのは、神さまのご計画としか考えられなかった。数多くの職業の中で、わざわざこの道が用

意されたのは、母と向き合うために必然だったのかもしれない。

母は、信仰があったため中絶を選ばず私を産んだ。しかし彼女にとって私は要らない存在だったのは明らかで、産まれた瞬間から存在を否定されてしまった。

小さい頃の私を、遠目で見ていた今の私は「かわいそうに、かわいそうに」と振り返る。そんなとき、教会の信徒さんが「神さまに怒っていいんだよ」と教えてくれた。そう、生まれてきたのは私が悪いわけではない。「神さま、どうして私

たて軸よこ軸

神が共にいてくださる安心感

首里教会 東さよみ

をこの世にお遣わしになったのー？」怒りながらも、「神さまが、必要のないものをお造りになるはずはない」とも思い、私が生まれた意味を探していた。

世の中にはあまりにも暴力が多すぎる。虐待やDV、様々なハラスメント。家庭

に起こる暴力も、国と国との戦争も、構造は同じだ。力のある者から力のない者に向かう。抑圧された者が暴徒化することもある。力の不均衡が暴力を生むのだ。

ある神父さまは「神以外はすべて横並び」と教えてくださった。人間だけではなく動物も植物も、神の被造物すべて横

並びなのだ。人間は驕りすぎたと私は思っている。その結果、自然を破壊し、

神さまがくださった豊かな環境を汚してしまっている。神さまがくださった私たちの自由を、被造物を傷つける手段にしてはならない。「海の魚、空の鳥、地の土を這う生き物をすべて支配せよ」(創世記一・28)と、神が言われた支配とは、漢

字の通り「支えて配る」だ。搾取ではない。こうした暴力を、私たちは遠い昔から脈々と世代に紡いでしまった。地上戦を経験した沖縄の人ならわかるだろう。傷

ついた人や傷ついた土地は今もまだ癒えない。その後を生きる子どもたちに負の遺産を残すことになる。ウクライナとロシアも今すぐ戦争をやめてほしい。クリスマス、教皇さまは「戦争は無意味だ」と教えてくださった。

日本にいる私たちも、戦争が対岸の火事ではない。今、社会が大きく変わっていく。第三次世界大

戦が起きそうな勢いを感じているのは私だけではないはずだ。どんな時代も暴力を受けていい人は一人もいない。誰もが、被害者にも加害者にも傍観者にもならないでほしい。それぞれの人権が守られる世界であってほしい。

神さまは私たちと共に在るために、幼子イエスとして来てくださった。あなたも私もそのままにいていいと、幼きイエスさまから言われているような気がする。教会の中でも外でも、いつも大きな愛を感じ、しっかり受け取れる器を持ちたいと思う。

御礼 青少年クリスマス会

昨年、クリスマス間近な12月18日(日)2時より、イエス様の御降誕を祝い美しく飾られた普天間教会において、教区青少年クリスマス会が催されました。青少年60人余、総計150人余、大勢のご参加をいただき盛会に行われました。2時半からウエイン司教様主式で、4人の神父様方による御ミサが執り行われ、大勢の青少年、信徒の皆様が御ミサの恵みに与りました。その後与那原教会の島袋賢さんの進行のもと、ガーデンパーティが楽しく開かれました。普天間教会のご奉仕によるバイキング式の美味しい食事が提供され、ガーデンのあちらこちらで楽しい会話も弾みました。舞台の上では、ジミー先生の楽しい手品、フィリピンの方々の美しいクリスマスダンス、読谷教会皆様の息の合ったクリスマスキャロル等、拍手と笑顔で会も盛り上がりしました。サンタさんも登場し、子供達へのクリスマスプレゼントが一人ひとり手渡され、喜びのパーティでした。今回の集いを催すにあたり、たくさんの方々のご協力、ご支援を頂きました。特に教区女性の会の皆様、那覇教区の皆様、普天間教会の信徒の皆様、その他、心から感謝します。幸いに雨も降らず、神様もこの集いを祝福してくださり、神に感謝です。コロナ禍で、教区の皆さんが一堂に集うことも思うようにいかない昨今でしたが、去年はサマーキャンプ、今回の青少年クリスマス会と、盛大に持つことができました。教区が一つとなって楽しい集いが持てました事、神様の恵みに感謝、皆様に感謝します。

那覇教区青少年担当司祭 ナビーン神父

2023年1月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時: 2023年1月10日(火) 10:30~12:00

会議の前にクレバー神父の司式で、1/5に帰天されたクレバー神父のご母堂リリー・デソーザ様と
年末12/31に帰天された名誉教皇ベネディクト16世のため、追悼ミサが捧げられた。

1. 報告及び連絡事項: 司会はクレバー神父が担当。

- ・はじめにウェイン司教から司教と教区司祭団の名前で、クレバー神父のご実家にお花を送ったことが報告された。
- ・前回(12月会議)の報告を新田が行い、承認された。
- ・ウェイン司教より、沖縄で行われた長崎教会管区司教の集いについて報告が行われた。ハンセン病に対する教会の姿勢や言葉使いなどに偏見や誤解はなかったかどうか、専門家の意見も伺って理解を深めた。司教たちの集いの成果が今年の6・23の平和メッセージに反映されたら良いと思う。司教間でも継続して話し合い、理解を深めていきたい。
- ・前年のクリスマスと今年のお正月の取り組みについて、司祭たちに報告が求められ、それぞれの小教区の主任司祭たちから報告が行われた。
- ・12月18日に行われた青少年のクリスマス会について、担当のナビーン神父から報告が行われた。60名余りの子どもたちと大人たちもたくさん集まって応援頂いた。楽しい集いできたことを感謝する。
- ・カリタス那覇が協力して行った子ども支援について、担当のマーシーさんから報告が行なわれ、寄せられた沢山の支援物資を、必要としている方々にお届けできたことに感謝が述べられた。
- ・首里教会のボスコ神父の休暇と読谷教会リカルド神父の休暇の変更が報告された。
- ・カプチン会の年次黙想会に合わせて、カプチン会総長と NY管区長、インド管区長も来沖されることが報告された。黙想会はイエズス会のルカ神父が指導。総長、管区長は会則についての勉強会を行う予定であることが報告された。
- ・教区事務局長より、「世界子ども助け合いの日」の献金は教区で取りまとめるものなので、教区事務教区宛送金されるよう要請が行われた。
- ・サニー神父から具志川教会で行われるサントニーニョ祭について案内があり、フィリピン人信徒たちの集いも同日一緒に行われることが報告された。

2. 審議事項

- ・ウェイン司教からコロナ禍の教会活動について、司祭と評議員会で話し合い、感染状況にも留意しながら決めていくよう要請があった。余談ながら、与那原の「祈りの家」と恩納村の「黙想の家」は宿泊はできないので、そのことも正しく信徒たちに伝えるよう要請があった。
- ・2/11の教区の日について、担当のフランシス神父から報告が行われた。午後2時から感謝ミサ、3時半から5時まで祝賀会を行う方向で準備していることが報告された。お祝いの申込みは1/22に締め切ることも合わせて報告された。司教からは今年度で沖縄から撤退する石川のカリタス会に感謝状を用意することも報告された。
- ・3教区合同黙想会について、担当のブイ神父から報告が行われた。6/19(月)~6/23(金)の日程で、仙台教区長のエドガル・ガクタン司教を講師にお迎えし、宿泊先のホテルの申し込み等も添えて、案内を送る予定であることが報告された。
- ・6・23沖縄慰霊の日の巡礼について、担当のナビーン神父とマキシム神父から、小祿での早朝ミサの後、若者たちに委託して巡礼のリードを任せたいが、まだ話し合いの段階で、できる取り組みを進めたい意向であることが報告された。
- ・ウェイン司教から、大陸別シノドスについて、担当の菊地大司教からアンケートが届いている。回答は自由であるが、教区でどう取り扱っていくかを検討していることが報告された。
- ・司教訪問、ミサの予定について、マーシーさんから報告があった。1/15、首里教会のミサ、午後は教区女性の会新年の集い。1/22、首里教会のミサ、1/29、具志川教会、サントニーニョ祭、ミサ。2/5、首里教会。2/7、司祭会議。2/12、安里教会公式訪問。
- ・典礼に関して、ウェイン司教と押川名誉司教から、司祭たちに注意喚起された。緊急洗礼でないのであれば、大人の洗礼式は四旬節中の志願式から始まって、復活徹夜祭で行われるべきであることが指摘された。入門式と洗礼志願式も別々の典礼であり、簡素化してまとめるような行為は厳に慎むよう要請があった。
- ・事務局長から教区分担金の1%値上げの説明と報告が行われ、会計担当者に資料を渡して、確実に履行されるよう要請があった。
- ・古川神父より、開南教会で1/18に教誨師の集いが開かれることが報告された。
- ・次回司祭助祭拡大会議は2/7(火)に行うことが報告された。

2023年1月16日 承認: ウェイン・フランシス・パーント司教 記録: 新田 選

声

角笛

歓喜の歌

われら、みな兄弟

平和委員会 稲福捷夫

日本の音楽シーンで年末の風物詩といえばベートーヴェンの「第九」である。正式な名称は「交響曲第九番二短調作品125『合唱付き』」であるが、通常「第九」で呼ばれている。この時期になると日本各地で演奏会が頻繁に行なわれるはずであるが、コロナ禍ではそうはいかない。

私は今年、二〇二二年の大晦日、NHKさんの番組のお世話になった。タクトを振ったのは二〇二四年限りでの引退を表明した七十六歳の井上道義氏。満を持しての登壇だった。ソリス

トはメッツ・ソプラノの藤村美穂子をはじめ世界の第一線活躍している面々。期待に違わぬ素晴らしい演奏だった。

ベートーヴェンの「第九」のテーマは対立や分断を乗り越えて一つに繋がること。歓喜の歌のキーワードは「人は皆、友となる」。すなわち兄弟愛・同胞愛・宇宙愛である。それを管弦楽団と百名以上のコーラスで歌い上

げる。それは圧巻である。

過去の「第九」の演奏会の中で、私の記憶に鮮烈に残っているのが、「ベルリンの壁」の崩壊という歴史的出来事に沸くベルリンで、急遽執り行われたクリスマス・コンサートである。残念ながら、私は生の演奏を聴いていない。DVDでの追体験をしただけだ。参加した交響楽団はバイエルン放送管弦楽団（西ドイツ）をメインに、ドレスデン国立管弦楽団員（東ドイツ）、レーニングラード・キロフ劇場管弦楽団員（ソ連）、ロンドン交響楽団員（イギリス）、ニューヨーク・フィルハーモニック団員（アメリカ）、そしてパリ管弦楽団員（フランス）で構成されていた。

一九八九年の東ドイツ等の東欧諸国の革命とともに、ソヴィエト連邦の崩壊は東西冷戦の雪解けを意味した。ソヴィエト傘下のウクライナなどは傘がなくなつて独立した。

二十一世紀は「平和の世紀」と夢想したのは私だけだったのだろうか？しかし二十一世紀の幕開けは9・11米国同時多発テロ事件であつた。そして今、毎日テレビで目にするのはウクライナの戦争だ。一人の為政者の蛮行がいかに世界を混乱させるかを目の当たりにしている。そして私たちの国の為政者はウクライナの戦争をいかに台湾有事にかこつけて、防衛費を増額し、南西諸島のミサイルの要塞化を目論んでいる。今ひとたびこの沖縄を戦場にしようとしているのだ。私たちは教会でまた家庭で、この一年近く、「ウクライナの平和を求める祈り」を唱えている。

その中のフレーズ「戦争か平和かをきめる権力を持つ人々のために祈ります。彼らの決断が、知恵と、識別と哀れみによって導かれますように」と。

今年の那覇教区目標は「われら皆 和解の器 平和の担い手」。和解の器の「器」は「土の器」を連想させる（Ⅱコリント四・7〜15）。ウエイン司教は一月八

日の公式訪問の際、「担う」という言葉に「十字架を担うイエスの像」を重ねたと言われた。キリストの平和の実現だ。

私たち那覇教区の平和委員会、三年もの休眠から目覚めて、活動を再開する。

教区 NEWS 教会

シスターとの交流会

石川福音教会

牧師 重元清

十月二十三日（日）午後一時から、石川福音教会に石川カトリック教会の牧山シスターと山シスターが来て下さり、交流会を持つ事が出来ました。参加者は全部で十四名でした。双方の間に立つて連絡を取ってくだ



さつたのは泡瀬カトリック教会の山田圭吾さんです。

以前から石川市民クリスマス会がおこなわれ、プロテスタント、カトリックの交流が石川に生まれて来ていましたが、親しく話し合うことはありませんでした。そんな中、今年四月の石川福音教会の総会で「カトリックのシスターとの交流会が持たないか」と提案がなされ、実現することになったわけです。

シスターがどんな生活なさっているのかほとんど知らない私達が、二人のシスターにつぎつぎと質問の矢を放つての交流会となつて行きました。シスターになる決断は何歳の時になさつたのか？。どんな生活を毎日なさっているのか？。誰が料理を作るのか？。後悔はしていないのか？。たぶん失礼な質問もあったのではないかと思います。すが、終始にこやかに、丁寧に答えてくださいました。

そんな二人の人格に触れながら、参加したメンバーが心の深いところで感じていたのは「規律ある不自由に見える生活を送りながら、私たちよりはるかに自由に生きておられるのではないか」という事だったと思います。

二人が沖縄に来られて六年、しかし、来年の三月には、カリタス会が沖縄から手を引くのを

機に、沖繩を離れると伺って、初めて会ったのに寂しい思いになりました。それほど楽しい、豊かな交流会でした。

聖堂内に

テレビモニター設置

待降節から新しいミサ式次第が実施されることを契機に、テレビモニターが設置されました。

冊子の式次第だと小さな文字で見えづらく、手元と祭壇を交互に見ることでミサの流れについていくのが不安だとの声もありました。モニターを祭壇に向かって両側に設置することにより、顔を上げたままでもいられることで落ち着いてミサに参加で



きると好評です。式次第やお知らせ等を映し出したり、ミサ前には歌唱部分についての練習等にも活用でき、クリスマスにはバチカンのミサ中継を見ることができたりで喜んでいます。

以前、教区行事で手話通訳をしていた際には「目障り」と言われたり、バリアフリーが話題になった時には「必要な人がいるのか」、「費用負担が大変だ」とか、今回のモニター設置についても同じような声もあったそうです。しかし、様々な人が集まる教会で、今後そのような配慮を必要としている人がいるということに思いを寄せることが求められているのではないかと話し合う機会にもなりました。(泡瀬教会 山田圭吾)

神様のめぐみの中で 宮古島の教会

十二月二十五日(日)、保良教会で、三年生のクララ・カリンさんとファウステイナ・ソフィアさんのふたりが、待望の初聖体を受けました。

この日は、シスターリーの指導のもとに学んできたふたりにとって特別な日。ヨアキム神父さまの「ミサの司式のもと、ふたりは家族や友達、信者の方々に囲まれながら主の御体をいただく喜びに包まれました。これ

からの信仰生活にとって大きな恵みです。

その後、感謝のうちに皆で、ふたりの初聖体とクリスマスを楽しむ、喜びを分かち合いました。

翌日の十二月二十六日(月)、平良教会では子供たちの「クリスマス会」が開かれました。一堂に会する機会がめつたにない中、この日は、五歳から中学生



までの総勢十一名が集まったのは嬉しいことです。歌を歌い、ビンゴゲームをし、ケーキをいただき、祈りのうちにすごした子どもたちには笑いがあふれ、楽しく大切なひとときだったことでしょう。この計画はヨアキム神父さまをはじめ、「子ども会」担当のシスター砂川、島尻末子さんのたくさんの準備、そして保護者の皆さまの協力のおかげでもありました。

大人は、未来の希望のひかりである子どもたちのために常に祈り、サポートする事が必要不可欠である事を考えさせられた日でもあったのではと思われま

す。神様の恵みに感謝し、再びのつどいを願いながら、子供たちはそれぞれの家路へと向かい

教区女性の会 新年の集い

去る一月十五日(日)午後二時から四時半ごろまで、安里教会で「二〇二三年度新年の集い」が開催され、約六十名近くの方が参加しました。

初めに、ウエイン司教様による新年の挨拶と講話で今年度の幕開けとなりました。講話は教皇ベネディクト十六世の三十九回目の一般謁見演説のマリア賛



歌についてお話されました。

私はそのお話の中で特に、おとめマリアは自分が人類のために実現しなければならぬ使命を帯びており、自分の人生は救いの歴史と結ばれているのだということを自覚していた、というところに深い感銘を覚えしました。私自身の信仰のあり方を改めて考えさせられました。

その後にはフランシス神父様より新年の祈りをいただき、共同祈願として各小教区より召命の祈り、いのちの祈り、家庭の祈り、平和の祈りを捧げました。

講話と祈りの後、各小教区で一品持ち寄りの会食および交流会が、ウエイン司教様の祝福と食前の祈りによって始まりました。約三十名ほどの参加でした



Sto. Niño
Fiesta Celebration in honor of
具志川カトリック教会
Gushikawa Catholic Church
January 29, 2023 / Sunday / 10:00 AM
Theme: "Sto Niño journeying with the
Migrants and people on the move."
Holy Mass to be presided by
Most Rev. Wayne Francis Berndt, OFM, Cap.
第18回 サントニーニョフェスティバル
Santo Niño Festival
日時: 2023年1月29日 (日)
Date: January 29, 2023
場所: カトリック具志川教会
Place: Gushikawa Catholic Church
ミサ: 10時、ミサ司式: 司教様、サニー神父様
Mass: 10:00 a.m. (Mass led by Bishop Wayne and Father Sunny)
行列: 11時30分正午、ミサ終了後
Procession: 11:30 a.m. (After Mass)
パレード: アトラクションは行列終了後開始
Festival Attraction will start after procession.
終了: 16時
End 4:00 p.m.
観料: 無料
Clean up

去る一月二十九日、具志川教会において、二〇二三年のサントニーニョ（聖なる幼子イエス）祭が開かれました。今年のテーマは、「移住者や移動中の人々と一緒に旅する幼子イエス様」でした。私たちは子供であることの喜びと優しさを持ち続けなければなりません。私たちは聖なる幼子イエスとその両親ヨセフ、マリアと並んで旅を続けなければなりません。私たちはこの聖なる幼子イエスの祝日に喜びと幸せをもってカトリック信者としての信仰と共同体を強めることを学ばなければならないのです。沢山の皆様の参列に感謝いたします。

二〇二三年 サントニーニョ祭

具志川教会 サニー神父

が久々の会とあって、皆様それぞれの健康や状況報告等が盛んに交わされ、笑顔一杯の賑やかな交流会となりました。

まだまだコロナ禍で色々と対策をとりながら、今回の行事が無事に行えたことに感謝いたします。今後とも十分に対策をとりつつ頑張っていく所存です。皆様、主に感謝し、今年も共に頑張ってくださいませ。

（普天間教会 中里光代）

灰の水曜日

2月22日の灰の水曜日から四旬節が始まります。回心と愛のわざに励み、罪から解放されて、御子イエスの受難をふさわしく記念することができるよう努めて参りましょう。



洗礼と初聖体おめでとうございます。

安里教会 (2022年12月24日)

初聖体：ミカエル安和朝秀・クララ安和聖菜

洗 礼：幼きイエスのテレジア大高史子

計 報

◆首里教会

マリア 清水 敏枝 様
二〇二三年十二月三十一日帰天
享年八十八歳

◆安里教会

アベラのテレジア 林 方子 様
二〇二三年一月十四日帰天
享年九十三歳

◆開南教会

クララ 仲本 ミエ子 様
二〇二三年一月十五日帰天
享年百一歳

ヨセフ 津波古充久
二〇二三年一月二十二日帰天
享年九十一歳

◆聖マリアの汚れなき御心の フランシスコ姉妹会

シスターピア 大浜 美枝子 様
二〇二三年一月十八日帰天
享年八十八歳

NPO 法人ぶどう園の会

訪問看護ステーションクララ



TEL&FAX:098-937-5001

住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)

・営業時間 8:30～17:30

・営業日 24時間365日(緊急対応含む)



葬祭の 「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥堀町4-57-3

TEL&FAX:098-885-8205

<http://w1.nirai.ne.jp/yasurai>

E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間
受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～
そうてんしゃ

葬 典 社

*創業30数余年・・・。

*皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。

*ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

ひ が たかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間
受付

てんごく

☎098-853-1059

